

渋谷 美和

1. 事業実施の目的

報告者は認知症を患う独居女性が日常をどのように経験しているのかを明らかにすることを目的とした調査研究を行っている。この事業実施の目的は、日本文化人類学会第 59 回研究大会においてその研究成果の一部を「病いの人類学における「うしろめたさ」の記述の可能性」として発表し、そこでの議論を通して得た新しい知見により、博士論文の内容をより充実させることであった。

2. 実施場所

筑波大学筑波キャンパス

3. 実施期日

2025 年 6 月 7 日 (土) ～ 2025 年 6 月 8 日 (日)

4. 成果報告

●事業の概要

日本文化人類学会第 59 回研究大会に参加し、自身の博論調査の研究成果の一部を発表した。学会初日 6 月 7 日 (土) は医療人類学者を対象にしたワークショップに参加し、成果を得た。二日目におこなわれた報告者の研究発表については別の項目で詳細を述べることにして、この欄ではワークショップについて述べる。

2017 年、「医学教育モデル・コア・カリキュラム 平成 28 年度改訂版」において、文化人類学（および社会学）の内容が日本の医学教育史上初めて医学教育の中に正式に組み込まれることとなった。その背景には、近年の医学教育において、医学生が実際の住民生活の場に身を置いて医療実践を学ぶ「地域医療実習」の重要性が高まっていることがある。これに伴い、人類学的なフィールドワークの研究手法への関心も、医療教育の現場で強まってきた。

この医学教育のカリキュラム改革を受けて、日本文化人類学会では 2017 年度に「医療者向け人類学教育連携委員会」を設立した。以後、医学教育に携わる医療者たちが人類学者たちとのネットワークを新しく構築し、人類学教育の導入と推進に向けた取り組みが継続的に行われている。報告者が参加したワークショップもその一環として開催されたものである。その目的は、医学教育に関心のある人類学者と、地域医療実習に関わる医療者とが、医学教育におけるフィールドワークの意義と方法を対話的に検討することであった。

当日は参加者が 6 つのグループに分かれて議論を行った。報告者の属したグループは 8 名で構成されており、そのうち 2 名が医療従事者、1 名が医学部生であった。また、人類学を専門とする 5 名の参加者の中には、看護師資格を有する者もあり、非常に多様なバックグラウンドを持つメンバーが集まっていた。

グループワークでは、それぞれのグループに異なる課題が与えられた。報告者がいたグループの課題は、「医学部3年生が大学病院とは異なる場で実習を行う際に、効果的なフィールドワークの方法をいかに設計するか」というものであった。この実習の教育目標は、プライマリ・ケアや在宅医療、疾病予防・健康増進の取り組みなど、大学病院以外の場での医療を体験することを通じて、地域における医療・保健・福祉の実態と課題を理解し、患者中心のチーム医療のあり方を体験することで、医療の全体像を学ぶことにある。

ディスカッションは非常に活発に展開され、さまざまな意見が交わされた。議論を重ねる中で、具体的な授業方法として、「患者団体や患者スピーカーと医学生が対話する機会を設け、その後にフィードバックの時間を設ける」案に収斂されていった。さらに対話の後、患者団体や患者スピーカーと医学生が「どのような話題で盛り上がったか」「違和感を覚えたのはどのような場面か」といった点について、学生と患者双方が互いに振り返る時間を持つことの重要性も指摘された。学生にとっては「自分がそこで何を感じ、考えていたのか」を自覚する自己省察の機会となると同時に、「相手がどのように感じていたのか」という気づきを得る契機にもなるからである。しかも、こうした経験は、将来的に臨床の現場で患者とコミュニケーションをとる際にも大いに役立つ、という意見で一致が得られた。

グループの多くの参加者が実際に医学教育に関わった経験を有していたため、議論では専門用語も頻繁に登場し、知識の浅い報告者にとってはややハイレベルな内容ではあった。しかし、「患者スピーカー」という、病気や障害の経験を他者に伝える講演活動を行う患者の存在や、そのような活動を支援する養成講座があることなど、これまで知らなかった多くの知見を得ることができた。

このように、医学と人類学の交差点に立ち、多様な立場の参加者と意見を交わすことができた本ワークショップへの参加は、非常に有意義で学びの多い経験であった。

●学会発表について

学会では「病いの人類学における「うしろめたさ」の記述の可能性」と題して、博士論文の研究成果の一部を発表した。発表した内容は、病者を調査者とは異なる異質な「他者」として描きがちであった従来の「病いの人類学」の記述を代替する新たな方法として、調査する側の調査される側に対する「うしろめたい」気持ちを書き込む記述を提案した。

この発表に対し、一人の研究者から調査者の「うしろめたい」気持ちを記述するエスノグラフィーでは、調査者と被調査者との個別具体的なマイクロな関係のもとに描かれるため、エスノグラフィーを読む読者たちはその関係の外に置かれてしまい、今度は読者が「他者化」されてしまうとの指摘がなされた。この指摘を受けて、調査者と被調査者と読者の三者が同じ「世界」の「共在者」となるような方法論を提唱するには、今の議論を精

緻化させる必要があることに気づいた。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業により学会に参加し、発表することで、質疑応答では読者の「他者化」の課題に関する鋭い指摘を得ることができた。これを新たなエスノグラフィー記述法の提唱の議論に盛り込み、査読誌論文投稿レベルにまで内容をブラッシュアップさせたい。

●本事業について

学生派遣事業のおかげで、学会発表することができ、ワークショップにも参加することができた。資金面で常に困難な状況にある学生にとってはありがたい制度である。